発達障害・精神障害を有する不登校児に対する作業療法支援
—地域の支援機関との連携プロジェクト—

林部　美紀[1]，　真下　いずみ[1]，高畑　脩平[1]，　尾藤　祥子[1]

[1] 藍野大学　作業療法学科

報告概要　今回、社会貢献委員会からの承認を得て、3 回の引きこもり・不登校のイベントを実施した。講演は各回約 30 名の参加、ピアカウンセリングは 9 名の参加があった。参加者は当事者・家族のみならず、大学近隣の支援者も多数おり、引きこもり・不登校支援における関心の高さが伺えた。今後は近隣の機関と連携をとってより一層引きこもり・不登校支援の幅を広げていきたい。

１．はじめに

文部科学省の令和 5 年度調査結果によると[1]、小・中学校の不登校児童は過去最多となっており、行政・民間・地域等、多角的な関わりが必要となっている。藍野大学がある茨木市に関しては、発表者らで構成されたチームにより情報収集を行った結果、小学生から中学生までは教育センターが主となりサポートしていることがわかった。一方、①発達支援や精神心理の専門家に場所の提供や支援を受ける機会が少ないこと、②高校卒業後は不登校や引きこもりに対する支援が不足していること、の２点が課題として挙げられた。不登校児童の原因として、発達障害を抱えている児童や精神疾患を抱えている児童、家庭環境や学校環境により心理的葛藤を抱えている児童も少なくない。藍野大学の作業療法学科は発達障害分野、精神障害分野を専門とする教員が在籍しており、その中で茨木市の行政と連絡が密にできる教員、不登校支援を専門とした教員もおり、茨木市の不登校問題について支援できるのではないかと考えた。

２．目的

今回のプロジェクトの目的は、今後、藍野大学が地域貢献として引きこもり・不登校支援の拠点として関連機関と連携するために藍野大学作業療法学科の発達障害と精神障害の教員が中心となって、作業療法士が実施する引きこもり・不登校支援についての啓発活動をすること、および不登校児や保護者に対して、作業療法士が実施するピアカウンセリングを実践することである。

３．実施内容

3 回のイベントを実施した。その都度、発表者の 4 名で話し合い、イベントの内容を考案し、毎回 A4 のチラシを作成した。それを発表者らが茨木市の行政機関、支援機関、支援者、当事者、保護者に説明・配布を行った。また、茨木の地域連携会議の場でも説明・配布を行った。

①１回目「引きこもり・不登校支援の実際」の講演
日時：2024 年 9 月 29 日 13:30-15:30
場所：藍野大学 MLC 棟 2 階アクティブコモンズ
内容：3 名の講師による講演を実施した。1 人目は引きこもり・不登校支援専門の作業療法学科教員の真下いずみが不登校の概要と精神科作業療法士からの不登校支援の視点について講演した。2 人目は学校作業療法を実践している尾藤祥子が実際の不登校児童への支援、学校での支援について講演した。3 人目は引きこもり経験があり、現在就労継続支援 B 型「せいかファーム、ぷらすファーム」のサービス管理責任者でシンガーソングライターの田中暁氏を講師で招き、引きこもりの経験を話してもらい、弾き語りによる引きこもりに関連した歌も披露してもらった。講演後、全体で引きこもり・不登校支援をしている方々の自己紹介をしてもらった。

②２回目「保護者カフェ」
日時：2024 年 12 月 22 日 13:00-15:30
場所：藍野大学 MLC 棟 2 階アクティブコモンズ
内容：不登校児や学校への登校に不安がある児童の保護者向けにお茶・茶菓子を提供し、ピアカウンセリングの手法で 1 人ずつ不登校について、自由に語ってもらった。また、あいの発達支援リハビリ訪問看護ステーションの原千明作業療法士に不登校児を抱える親の立場からの講話をお願いした。

③３回目「児童の発達支援・方法」の講演
日時：2025 年 2 月 15 日 9:30-12:00
場所：藍野大学 MLC 棟 2 階アクティブコモンズ
内容：不登校支援の 3 回の取り組みを作業療法学科教員から説明し、リピーターで不登校支援をしている方 3 名に感想を述べてもらった。その後、児童発達支援・放課後デイサービスえんりっちの作業療法士である中川瑛三氏による「その人らしい育ちを支援する作業療法」というテーマで講演いただいた。その後、中川氏と藍野大学作業療法学科で発達支援のスペシャリストである高畑脩平との質疑応答と座談会を準備した。

４．結果・今後の展望

１）1 回目　参加人数は 30 名で、引きこもり当事者やその家族、医療系、地域問わず、多数の支援者の参加となった。アンケート結果、参加者の立場を示

す（図１）。アンケートはスマートフォンにて Google 集計を利用した。アンケート総数は 14 であった。

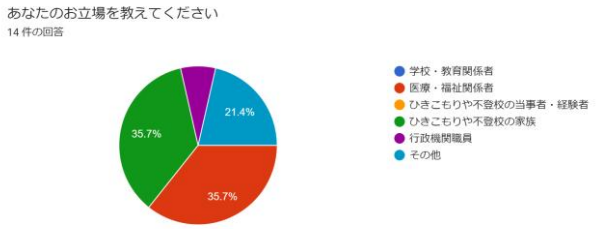

図１．参加者の立場　医療・福祉関係者が 35.7%，引きこもりや不登校の家族が 35.7%，その他が 21.4%となった。

参加動機については、「支援者と当事者の話を聞けると思った」やチラシをみて、「スペシャリストの方のお話を聞いてみたいと思った」や「子供の気持ちや生きづらさについて理解したかった」というものがあった。また、講演の理解度については、5 段階中 5 の「とても理解できた」が約 60%、4 の「理解できた」が約 40%となった。感想については、「専門職からお話を聞くことで、理解を深めることができました」や「田中さんの歌には感動しました」、「研修参加できたことに感謝します」など、参加者に有意義な時間となったと思われる。

２）2 回目　参加者数は 9 名（7 名の保護者と 2 名の子ども）。20 分程度、原作業療法士の話をしてもらい、その語、不登校について、1 人ずつ話をしてもらった。休憩も交えながら 1 人 10 分以上の時間を取ることができ、余裕を持った会の進行ができた。

紙ベースの感想を最後に書いてもらった。7 名の保護者から感想をもらった。感想では、「新しいつながりができた。」「これからも続けていただきたい。」「起業したお子様のお話をこれからも聞きたい。」「いろいろな方の話が聴けてよかった。」「こんなにゆっくりと話ができてとても充実していた。」「次の 2 月の講演会も楽しみにしている。」「共有できる情報も聞けて良かった。」など参加者にとって充実した時間となったようであった。

３）3 回目　参加者数は 28 名で、不登校児の家族、発達障害に関する様々な職種の支援者が参加した。その中でリピーターも数名いた。アンケート結果、参加者の立場を示す（図２）。アンケートはスマートフォンにて Google 集計を利用した。アンケート総数は 9 であった。

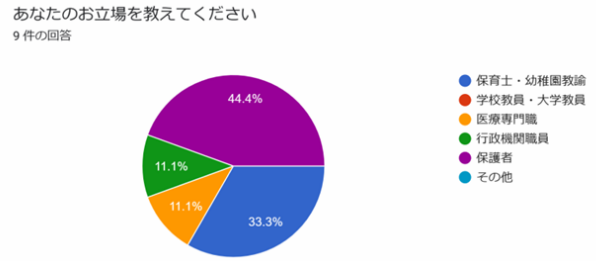

図２．参加者の立場　保護者が 44.4%，保育士・幼稚園経論がが 33.3%，医療専門職が 11.1%、行政機関職員が 11.1%となった。

参加動機としては、「子どもの学校での困りごとが、作業療法士さんの本と当てはまることが多く、話を聞いてみたかった。」や「作業療法士に興味があった。」などであった。また、講演の理解度については、5 段階中 5 の「とても理解できた。」が約 89%、4 の「理解できた」が約 11%となった。感想は「とても分かりやすく理解しやすかった。」や「具体的な支援例を挙げてくださっていて、とてもためになった。」や、「不登校のことをあらためて考えるきっかけになった。」という意見もあり、作業療法士の支援について一定の理解が得られたことが分かった。

今後の方針

この結果より、今回のプロジェクトの目的、①今後、藍野大学が地域貢献として引きこもり・不登校支援の拠点として関連機関と連携するために藍野大学作業療法学科の発達障害と精神障害の教員が中心となって、作業療法士が実施する引きこもり・不登校支援についての啓発活動をすることについては、引きこもりや不登校における作業療法士の支援の内容が、当事者や家族、そして、関連機関や関連職種にある程度認知され、藍野大学がある茨木周辺の地域の支援者とも顔見知りの関係となった。

②不登校児や保護者に対して、作業療法士が実施するピアカウンセリングを実践することについては、「保護者カフェ」という機会を作り、不登校児の保護者の困りごとや不安、また、解決方法などを知ることができた。また、そこに不登校児が参加したことで、不登校児の思いの発表の場になったことも波及効果として挙がった。

さらに大学という機関で実施できたのは、市民が足を運びやすく、安全な場所であったのも意味があったと考える。今後は、作業療法士の専門性を活かし、地域の支援者と連携しながら、大学の持つ、社会貢献という役割を果たして、支援していきたい。

引用文献

[1] 文部科学省　令和 5 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要
https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_2_2.pdf